九州看護福祉大学紀要
Vol.7, No.1, 35-43 (2005)
ISSN 1344-7505

［短　報］

思春期の児童・生徒の自己への肯定的感情の実態とそれを支えるもの
ー熊本県有明地域の調査結果をもとにー

久佐賀眞理[1,*]、 緒方妙子[1]、 與田千枝子[2]、 森川美奈子[3]
曽我史子[4]、 名原壽子[1]、 永田栄子[2]、 徳永淳也[1]、 末永英士[2]

【要旨】小学6年生245人と中学2年生356人を対象に、思春期に伴って起こる心身の不安や心配事、親・友だち・学校の先生・近所の人との人間関係について調査し、「自分が好き」という自己への肯定的感情との関連を明らかにした。その結果、自己への肯定的感情を持っていたのは、小学生39%、中学生24%であった。肯定的感情群と否定的感情群を比較したところ、小学生の自己への感情には心身の不安や心配事の有無、周囲との人間関係の影響は見られなかったが、中学生の肯定的感情には「不安や悩みを聞いてくれる学校の先生がいる」「話をする近所の人がいる」など周囲のおとなの存在が関与しており、否定的感情には「心や体の心配事がある」「友だちとの関係で悩んだ経験がある」「親の愛情が感じられない」等が関与していた。このことから、①「自分が好き」という肯定的感情を持つ人は、小学校から中学校にかけて減少する。②小学校から中学校にかけて減少する自己への肯定的感情を支えるには、親はもちろん教師や近所の人等が彼らの話に耳を傾けることと、小学校から中学校にかけて起こるであろう第二次性徴による心身の変化や、友だち・親との関係について考える機会の必要性が示唆された。

キーワード：　思春期、自己への肯定的感情、おとなの関与、第二次性徴の学習、友人・親子関係の学習

【緒言】

熊本県有明地域は、平成15年より開始した第四次保健医療計画により、思春期に焦点を当てた地域づくりを展開している[1)]。目標は、家族・友だち・地域の人々との繋がりを生かし、自己への肯定的感情と、自分も他者も大切にできる若者の育成である。そのためには家庭・学校・地域社会の有効な協力関係が必要との認識から、有明地域は以下の具体的な実践を重ねつつ三者相互の役割認識と連携のあり方を模索してきた。

一つは、地元看護協会支部会員と大学生・行政による、子ども・若者のためのまちの保健室「イコイバ」の開設[2) 3)]、二つ目は中学校と連携した性・飲酒・薬物等の教育活動、三つ目は地域の様々な人たちが生命の意味と思春期の人たちへの関わりを再考するための「生命（いのち）の教育指針（仮称）」の作成である。今回の報告は「生命の教育指針（仮称）」作成のために行った調査結果の一部で、思春期の中でも小中学校の児童・生徒を対象に自己への肯定的感情の実態と影響する要因を、心身の不安や心配事の有無、周囲との人間関係（特に話を聞きあう関係）に焦点を当て明らかにしたものである。

今回調査した「自分のことが好きですか」という自己への好悪の感情は、自己をいかに知覚しているかを知る手がかりで、広義の自尊感情に含まれると考える。しかし今回の調査では、信頼性の高い自尊感情尺度を使用していないため、自尊感情という用語は用いずに、自己への肯定的感情・否定的感情という表現を用いた。自尊感情は、それが適度に高い人は自分に対する信頼感や満足

[1]九州看護福祉大学　看護福祉学部看護学科、*連絡先、[2]熊本県有明保健所、[3]玉名市立石貫小学校、[4]玉名市立玉名中学校

度が高いのみならず他者を受容することもでき、逆に低い人は否定的な感情に支配され刹那的快楽や衝動的行動に走りやすいといわれる[4) 5)]。思春期の子ども・若者の自尊感情と健康問題（性・喫煙・薬物・肥満等の問題）との関連は以前から指摘されている[6)]。よって、今回調査した自己への感情も何らかの影響を及ぼしているかもしれないがその実態は明らかではない。

今後、有明地域が自己への肯定的感情を持つ子ども・若者の育成を目指すならば、何が肯定的感情に影響を及ぼす要因なのかを明らかにする必要がある。第二次性徴の影響をどう乗り超え、人間関係の中心が親から友だちへと変化するこの時期の、家庭・学校・地域とのつながりについて明らかにしておくことは意味のあることと思われる。

この研究の目的は、小学 6 年生と中学 2 年生の自己への感情の実態と、肯定的感情を支える要因を明らかにすることである。

[用語の定義]

1）思春期……「二次性徴の発現に始まり長骨骨端線の閉鎖を持って終結する身体的成長の過程を意味する」という説や、「10 歳前後から 17 歳前後」という年齢で分ける説等様々見られる[7)]が、本論文では大まかに 10 代の人をさす概念として用いる。

2）広義の自尊感情……自己の価値や能力に対する自分の評価をさす。ローゼンバーグやクーパースミスらの自尊感情尺度[8)]を用いて測定したものとは区別する。

3）地域……児童・生徒の日常生活圏を含む広がり（具体的には保健所管轄区域）をさす。

【方法】

1）調査時期　平成 16 年 3 月下旬

2）対象　有明地域の中学校 2 校（2 年生 361 人）と、同じ校区内の小学校 6 校（6 年生 245 人）を対象に実施した。対象校の選定は、本研究が地域作りの一段階であるため、調査結果を次の段階に生かせるよう共同研究者が所属する 2 地域とした。

3）方法　アンケートの設問は、それぞれの対象に日常接している養護教諭が中心となり、思春期の児童・生徒がよく悩む内容を KJ 法で抽出・整理し作成した。児童・生徒の時間的・心理的負担を少なくするため、プリテストを行い、わかりやすく書きやすい最小限の設問量と表現に修正した。

調査の実施は、教育委員会や各学校長の許可を得た後、事前に研究者が担任に調査目的や方法について説明を行い、児童・生徒への説明は各学級担任が実施した。無記名自記式調査で行い、記入後は各自が封筒に入れ、回収はその場で担任が行った。

4）調査内容

（1）自己への感情の測定は、対象の負担感を少なくするため既存の尺度は用いずに、「自分のことが好きですか？」という設問で尋ね、回答は「はい」「いいえ」の二者択一とした。

（2）思春期に伴って起こる不安や心配事は、共通設問と中学生のみの追加設問を設け、共通設問では「心や体の不安や心配事」「親との会話でいらいらする経験」「友だち関係で悩んだ経験」について尋ねた。中学生は「自分の気持ちを言いたくてもいえない経験」「親に愛されていると感じるか」を追加した。いずれも二者択一の回答様式である。心や体の具体的悩みは、設問を準備し複数回答で求め、親との会話でイライラする経験については、どのような時にイライラするかを自由記述で求めた。

（3）周囲との関係は、共通設問のみで「悩んでいる時、何でも話せる人がいるか」「近所の人と話をするか」を二者択一で尋ね、「保護者・友だち・学校の先生・近所の人は心配事や悩み事に耳を傾けてくれるか」「自分は、保護者・友だち・学校の先生・近所の人の困りごとに耳を傾けているか」については「よく・・してくれる（する）」「まあまあ・・してくれる（する）」「あまり・・してくれない（しない）」「・・してくれない（しない）」の四者択一で尋ねた。

5）分析方法

（1）年齢によって変化する自己への感情と関連

する要因を見るために、２学年間の比較をχ^2検定で分析した。

（２）肯定的感情を支えているものを明らかにするために、各年齢毎に肯定的感情群と否定的感情群を比較し、影響を及ぼす要因をχ^2検定で分析した。

使用した統計ソフトは spss10.1 である。

６）倫理的配慮

教員を通じて行うため、負担感を少なくする工夫として以下の点に配慮した。

（１）調査項目の作成に当たっては、対象者の状況に詳しい養護教諭（共同研究者）を中心に負担のかからない質問量と理解しやすい表現を用い作成した後、プリテストを行い児童・生徒の意見も反映した。その際、児童・生徒の家庭環境や些細なことが気になる年齢であることを考慮して、「両親」という言葉は「保護者」に変え、小学生の場合は暗い気持ちになる設問は避け、肯定的な質問を行うなど配慮した。

（２）児童・生徒への説明は担任を通じて行うため、教育委員会、学校長及び担任への説明を丁寧に行い、充分な理解が得られるように努力した。

（３）回答用紙には封筒を添付し、記入後は記入者の特定ができないように本人が回答用紙を封入し、それを回収した。

（４）調査結果の報告は、後日、報告書（「生命はぐくむ有明の森」）と、調査結果の知見を活かして作成したワークシート集（「生命かがやく有明の森」)を通じて返却していく予定である。

【結果】

１）回収率及び対象者の性別

小学校は回収数 245(回収率 100%)、有効回答数 245（有効回答率 100%）、内訳は男子 119 人, 女子 126 人で、中学校は回収数 356（回収率 98.6%）、有効回答数 356（有効回答率 100%）、内訳は男子 189 人、女子 167 人であった。小学生の性別割合は男子 48.6%、女子 51.4%、中学生の性別割合は男子 53.1%、女子 46.9%で、学年間の有意差は見られなかった。

２）自己への肯定的感情

学年別に見た自己への肯定的感情者の実態を図１に示した。小学生では肯定的感情の人が 38.8%（95 人）、否定的感情の人が 55.5%（136 人）、無回答が 5.7%（14 人）、中学生では肯定的感情の人が 24.4%（87 人）、否定的感情の人が 72.2%（257 人）、無回答が 3.4%（12 人）で、有意差が見られた（$p<0.001$）。

３）思春期の不安や心配事

学年別に見た困りごとの体験状況を図１に示した。小学生は「心や体の心配事」を持つ人が 31.0%（76 人）であったが、中学生は 66.6%（237 人）で 2 倍近く伸びており有意差が見られた（$p<0.001$）。「親との会話でのイライラ」を見ると、イライラすると答えた小学生は 35.1%（86 人）、中学生は 62.6%（223 人）で、「心や体の心配事」と同様に 2 倍近く伸びており有意差が見られた（$p<0.001$）。「友人関係で悩んだ経験」を見ると、小学生の 40.0%（90 人）、中学生の 66.9%（238 人）が悩んだ経験を持っており約 1.5 倍の伸びで有意差が見られた（$p<0.001$）。心や体の

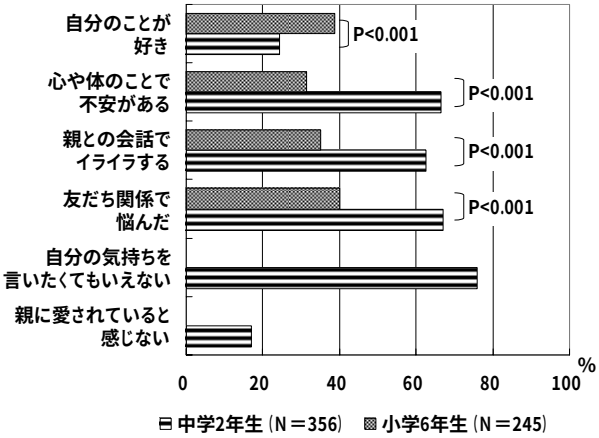

図1．小中学生の肯定的感情と思春期の心配事

心配事の具体的内容については図 2 に、どのような時に親にイライラするかについては表 1 に示した。小学校の場合はいずれの項目も 10%に至っていなかったが、中学生の場合は体重・身長・髪質・マイナス思考・顔と上位５位を上げた人は回答者の 3 割から 4 割を超えており、第 2 次成長に伴い起こる身体変化が、中学生の興味関心を大きく占めていることがわかった。さらに「わけ

もなくイライラする」という回答も小学生 8.6%から中学生 22.4%と伸びており、自分ではコントロールできない不安定な時期にあることもわかった。

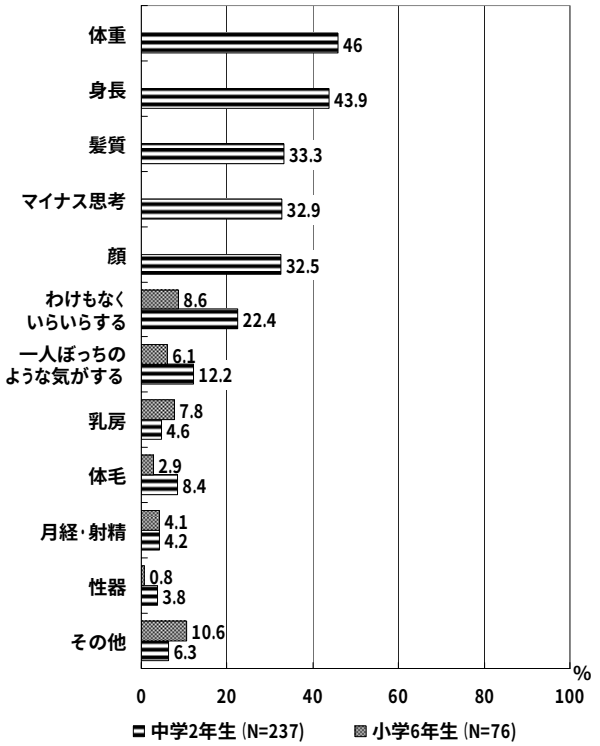

図2. 小中学生の心や体の心配事

中学 2 年生のみを見ると、一番多かったのが「自分の気持ちを言いたくてもいえない」ことで、75.8%（270 人）があげていた。また、親の愛情についても 17.1%（61 人）は「愛されていると感じない」と答えていた。

4）周囲との関係

学年別に見た周囲との関係を図３に示した。

（1）「悩んでいる時、何でも話せる人がいますか」の問いでは、小学生の 78.4%（192 人）、中学生の 79.5%（283 人）が「いる」と答えており、「いない」と答えた人は小学生 20.0%（49 人）、中学生 20.2%（72 人）とほぼ同率で、学年間の有意差は見られなかった。

（2）「近所の人と話をすることがありますか」の問いでは、「ある」と答えた人が小学生 71.4%（175 人）、中学生 54.8%（195 人）、「ない」と答えた人が小学生 28.2%（69 人）、中学生 45.2%（161 人）で、小学生の約 3 割、中学生の半数近くが近所の人との接触を持っておらず、学年間で有意差が見られた（p＜0.001）

表1. 小中学生が親にいらいらする時

分類項目	小学6年生 (N＝86)			中学2年生(N=223)		
	人数	(%)	記述例	人数	(%)	記述例
難度・そのときの状態	**62**	**(72.1)**		**141**	**(63.2)**	
(自分側の原因)	0			(5)	(2.2)	・言うのがめんどうくさい　・何もかもがウザイむかつく、死ねってかんじ　・会話じたいがめんどい　・とにかくイライラする　・親があまり好きではない
(親側の原因)	(58)	(67.4)	・しつこくきいてくる　・何でもぼくのせいにする　・話をきかない　・早くしろときれた言い方で言われた時　・おこられた時　・自分が何もしないで人のことばかりいう時　・話をしているのに他の話にそらす　・言おうとしたことを言わない　・言っていることを信じない時　・一方的に悪いように言われた時　・うてばいいと思っている　他	(99)	(44.4)	・同じことを何回もきいたり、しつこく言う　・自分のことをまだ子どもと認識している　・うざい　・指示ばっかりしてくる　・親はしないのにさせる　・うるさい　・ひつこい　・せわをやきすぎる　・おこられる　・ひていされたとき
(親子のずれ)	(4)	(4.7)	・けんか　・話が合わない時　他	(37)	(16.8)	・意見がちがった時　・自分がゆっくりしている時に、すぐ「これしろ、あれしろ」とうるさく言う　・言っても言ってもわからんとき　・自分の話を聞いてくれないとき　・自分の気持ちをわかってくれない　・わかっていることを言われる　・話が通じない　・「子どもの癖に」と言う言葉をよく使う
話の内容	**22**	**(25.6)**		**60**	**26.9**	
(進路・勉強・部活)	(15)	(17.7)	・かってにじゅくにいかされる時　・すきなことをしているのに「宿題は？」と言われた時　・勉強しなさいと言われる時　・中学校のことを言われた時、　他	(45)	(20.2)	・勉強しているのに「勉強しなさい」とうるさく言う　・いつも勉強のことばかり　・勉強勉強とうるさい　・勉強や部活のことでうるさく言われた時　・高校の話　・テストの点数が悪かった時
(兄弟の間の比較)	(2)	(2.5)	・ほかの子と比べられたような感じで話された時　他	(6)	(2.7)	・比較される　・兄弟と比べられる　・頭のいい人と比べられる　・弟にばかりひいきしたりする
(学校・友達の悪口)	(2)	(2.5)	・友達のことを言われた時　・人の悪口を言われた時	(1)	(0.4)	・親同士のトラブル
(その他)	(3)	(3.5)	・ねこのことでうるさくていらいらする　・へんなことを言われたとき　・りこんしたもう1人の親の悪口を言う時	(8)	(3.6)	・親のぐちを聞くとき　・行動を早くしなさいって言われた時　・「手伝いをしろ」ってうるさいとき　・自分の悪いところを言われた時　・人が気にしていることを言われた時　・ケータイのこと　・電話の内容を聞いてくる
分類不可・その他	**2**	**(2.5)**		**22**	**(9.9)**	・ささいなこと　・ほとんど　・全部　・いろいろ

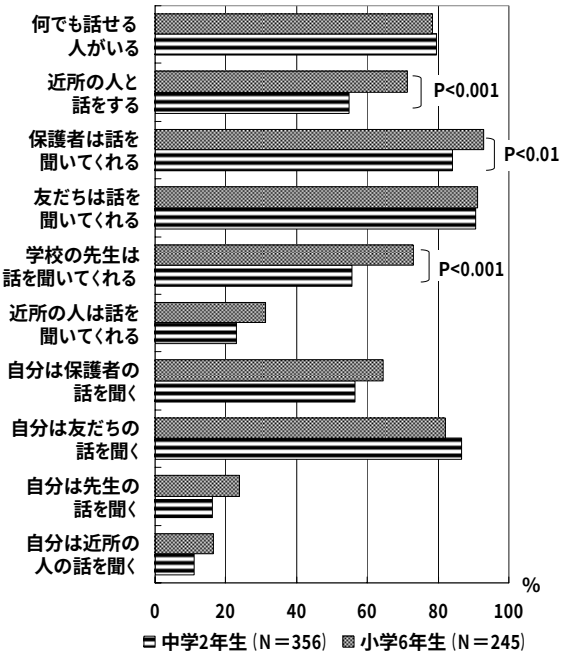

図3．小中学生の周囲の人との関係

（3）「保護者・友だち・学校の先生・近所の人はどのくらい心配事や悩みを聞いてくれますか」の問いについては、「よく聞いてくれる」「まあまあ聞いてくれる」を「聞いてくれる群」、「あまり聞いてくれない」「聞いてくれない」を「聞いてくれない群」として比較した。その結果、小学生が「聞いてくれる群」に上げた相手は高い方から、①保護者 92.8%、②友だち 91.3%、③学校の先生 72.9%、④近所の人 31.2%であったが、中学生の場合は①友だち 90.6%、②保護者 84.0%、③学校の先生 55.6%、④近所の人 22.9%で、保護者と友人が逆転していた。学年間で比較すると、保護者との関係、先生との関係に有意差（p＜0.05）が見られ、中学校になると小学校時代に比べその二者に話を聞いてもらうことが少なくなることがわかった。

表2．小中学生の自己への感情別でみた思春期の心配事と人間関係の実態

質問項目	小学6年生 (N=245)					中学2年生 (N=356)				
	肯定的感情群（人）		否定的感情群（人）		P	肯定的感情群（人）		否定的感情群（人）		P
	はい	いいえ	はい	いいえ		はい	いいえ	はい	いいえ	
1. 心や体のことで、心配なことと不安なことありますか？（共通）	31	62	42	93	NS	48	37	179	72	*
2. 親子の会話の中で、イライラすることがありますか？（共通）	33	62	46	87	NS	55	32	160	97	NS
3. 友達との関係で困ったり、悩んだりしたことがありますか？（共通）	23	72	43	93	NS	50	37	182	73	*
4. 自分の気持ちを言いたくても言えないことがありますか？（個別）	未調査		未調査			59	28	201	55	NS
5. あなたは親に愛されていると感じますか？（個別）	未調査		未調査			78	7	204	50	*
6. あなたは自分が悩んでいるとき、なんでも話せる人がいますか？	79	15	105	30	NS	72	14	202	55	NS
7. 近所の人と話をすることがありますか？	69	26	97	38	NS	64	23	127	130	***
8. 保護者は心配ごとや困ったことがある時、あなたの話を聞いてくれますか？	84	6	121	11	NS	76	8	206	42	NS
9. 友達は心配ごとや困ったことがある時、あなたの話を聞いてくれますか？	82	5	118	12	NS	79	6	228	24	NS
10. 学校の先生は心配ごとや困ったことがある時、あなたの話を聞いてくれますか？	68	18	84	40	NS	53	25	122	110	*
11. 近所の人は心配ごとや困ったことがある時、あなたの話を聞いてくれますか？	28	50	33	84	NS	22	53	48	178	NS
12. 保護者の心配や悩み事を、あなたはどのぐらいを聞いていますか？	57	32	84	47	NS	50	33	139	111	NS
13. 友達の心配や悩み事を、あなたはどのぐらいを聞いていますか？	69	20	114	18	NS	78	9	221	36	NS
14. 学校の先生の心配や悩み事を、あなたはどのぐらいを聞いていますか？	27	59	26	103	NS	14	66	38	203	NS
15. 近所の人の心配や悩み事を、あなたはどのぐらいを聞いていますか？	14	71	23	103	NS	11	69	25	218	NS

* P<0.05　** P<0.01　*** P＜0.001　肯定的感情群 VS, 否定的感情群

（4）「あなたは、保護者・友だち・学校の先生・近所の人の心配事や困り事をどのくらい聞いていますか」の問いも、「よく聞く」「まあまあ聞く」を「聞く群」、「あまり聞かない」「聞かない」を「聞かない群」として比較した。その結果、小学生が「話（心配事や悩み）を聞く群」に上げた相手は高い方から、①友達 82.1%、②保護者 64.4%、③学校の先生 23.9%、④近所の人 16.6％で、中学生も同様に①友だち 86.6%、②保護者 56.4%、③学校の先生 16.2%、④近所の人 11.1％であった。学年間で比較すると、いずれの人との関係も有意差は見られなかった。

（3）（4）の結果から、小学校から中学校にかけて、人間関係の中心が保護者から友だちへ変化し、保護者も含めた周囲のおとなとの距離がいづれも離れていくことがわかった。

5）各学年毎に、「自分のことが好き」な肯定的感情群と、「好きではない」否定的感情群に分け「不安なことや心配事の経験の有無」「周囲の人たちとの人間関係」を分析したものが表 2 である。

小学生の場合は、肯定的感情群と否定的感情群で有意差のみられた項目は無かったが、中学生になると、否定的感情群に「心や体の不安や心配事がある」「友だち関係で悩んだ経験がある」「親の愛情が感じられない」などの経験項目が高く有意差が見られた（$p<0.05$）。また、周囲との人間関係では肯定的感情群に「近所の人と話をすることがある」（$p<0.001$）「心配事や困ったことがある時、学校の先生が話を聞いてくれる」（$p<0.05$）等が高く有意差が見られた。

以上の結果から、自己への好悪の感情は小学生より中学生により強く現われ、その要因も中学生になると明確になってくることがわかった。否定的感情を導く要因としては「心や体の心配事」「友だち関係の悩み」「「親の愛情が感じられない」等で、肯定的感情を導く要因としては「学校の先生が話を聞いてくれる」「「近所の人と話をする」であった。

【考察】

1．小学 6 年生と中学 2 年生の調査結果から、思春期の自己への感情の特徴として以下の点が明らかになった。

一般に「子どもの自尊感情は小学 2～3 年生をピークに低下し始める」といわれる[8]が、「自分が好き」という自己への肯定的感情も、小学生から中学生にかけて有意に低下する。その要因としては「心や体の心配事」「親へのイライラ」「友だち関係の悩み」等が増加すること、8 割弱の中学生が「自分の気持ちを言いたくても言えない」状態にあること、さらに「近所の人と話をする機会」「親・学校の先生が話を聞いてくれる機会」が減少することなどである。

第 2 次性徴の開始は個人差があるが、中学 2 年という時期は女子は成長のスパートを過ぎ、男子はまさにその時期である[9]。中学生は外観に関する悩みが上位を占めていたことから、第 2 次性徴がもたらす外見の変化は彼らの心理を不安定にし、マイナス思考と相まって自己を否定的にとらえるのだと思われる。遠藤は、「自然な感情の経験や表出の裏打ちがあってこそ、子どもの中には実生活で生きる社会的知識が獲得される」と述べている[10]。第二次性徴を避けることはできない。だとすればそこで起こる心理的動揺を表出する機会とそのような態度を肯定する学習が必要だと思われる。変化の途中と軽視せず、情報を与えるだけにとどまらず、その現象に対する感情の表出を促して行く時に、その事実が客観視され、どう対処すればよいかが見えてくると思われる。そのためには応答のある関係が必要と思われる。

しかし親子の関係をみると 6 割強が親へのイライラを訴えていた。有吉は、思春期の感情表現の特徴として、「感情表現が裏腹で気持ちと逆の行動をとったり、極端に甘えたり真っ向から否定したりしながら自分というものを培い、力を得て、親に頼らずに自分を高めようとする」「恐怖、抑うつ、激情などの感情が出てそれが不安という形になっていく」と、成長への欲求と激しい感情の裏にある不安を指摘しているが[11]、今回の記述内容からもそれは伺えた。親が指示的態度で接し

たり、気持ちを理解してくれないこと、勉強の話や他者との比較について、小学生には見られない強い表現で嫌悪感をあらわしていた。背景には、変化した自分が認められないことへの憤り、成績や進路に対する不安、話をちゃんと聞いてもらってない感があると思われる。よって親子の応答のある関係は思春期以前に確立しておく必要がある。

友だち関係の悩みも自己への否定的感情に関与していた。図3で示されたように、中学生は友だちに話を聞いてもらうだけでなく、自分も積極的に相談相手になっており、対等な関係や人の役に立つ体験の中で自己を培う時期ともいえる。平成13年度の児童・生徒の環境調査でも、小学6年生と中学2年生が大切に思うことのトップは「友達がたくさんいること」であった[12]。それだけに友達とのトラブルを解決できず、先生にも相談しにくい状況があれば、自己の能力に自信をなくすことも考えられる。

ポープは自尊感情尺度の構成要素として①社会的領域(周囲の友達に対する友人としての自分への評価)、②学力的領域(学校における児童・生徒としての自分への評価)、③家族の自尊感情(家族の一員としての自分への評価)、④身体イメージ(身体的な見かけと能力に対する自分の評価)、⑤全体的な自尊感情(「私はよい人である」というような、自分への全般的な評価)、の5つをあげている[13]。今回小学6年生から中学2年生にかけて増加する自己への否定的感情も、ホープの①から④領域の項目に該当することから、小中学生が自分に対して抱える好悪の感情も、尺度を使った自尊感情と近い可能性が示唆された。

2.各学年ごとの肯定的感情群と否定的感情群の比較から、肯定的感情を支えるものについて以下のことが指摘できる。

小学生はいずれの設問項目も有意差は見られなかったが、中学生の場合は、肯定的感情群に「心や体についての不安や心配事」や「友人関係の悩み」が少ない、「親の愛情への確信がある」などの心理的要因の他に、「近所の人と話している」「学校の先生にも心配事や悩みを聞いてもらっている」等の環境的要因の関与も見られた。このことから、小学校から中学校にかけて低下しがちな自己への肯定的感情を支えるのは、一つはおとなとの関係があると思われる。それも従来言われていた親や学校の先生という日常生活で関わりの深いおとなから受け入れられるだけでなく、近所の人という直接は無関係な地域のおとなからも受容されることの重要性が示唆された。佐藤は、「学校の内と外を結ぶ活動、あるいは学校と切れたところで安心して受容され親・教師以外のおとなや異年齢の友だちと出会える場所が中高生の閉塞感を打ち破る」と述べている[14]。近所の人と話すことが肯定的感情に結びつく理由の一つと思われる。

今回は特に聞く・話すという応答の関係を調査したが、小学生から中学生に向けて低下する自己への感情を支えるのは、周囲のおとな(親・学校の先生・近所の人)との間で、「聞いてもらう」「話す」という応答の関係の有無が関与していることがわかった。「語ることは、起きてしまった非やそれに伴って経験した感情を次の行動にどう結びつければよいかを学ぶ機会」[10]であるが、自分の気持ちを言いたくてもいえない中学生にとっては、それを素直に求めることは難しいと思われる。むしろ周囲のおとなに根気強く聞き役に回る努力や、上学年になるにつれ閉ざされがちな社会性を広げていく働きかけが求められよう。

【結論】小学6年生と中学2年生を対象に、自己への感情と思春期に起こると思われる不安や心配事、親・友だち・学校の先生・近所の人との人間関係との関連について調査したところ次のことが明らかになった。

1)「自分が好き」という自己への肯定的感情を持っているのは、小学生の約4割、中学生の2割強であった。年齢と共に低下する要因として、「心や体の心配事」「親へのイライラ」「友だち関係の悩み」が小学生に比較し増加すること、8割弱の生徒が「自分の気持ちを言えない」状態にあることなどが上げられた。

2)小学校から中学校にかけて低下しがちな肯定的感情を支えるには、親や学校の先生等のおとなが、自分の気持ちを言えない児童・生徒に対して

根気強く聞き役に回り、感情を表出することを通して次の行動にどう結びつければよいかを考える機会を提供する必要がある。
３）さらに社会性を育てて行く役割として、近所の人のように家庭や学校とは切れたところで受け止めるおとなの存在が必要とされている。
４）今後の思春期対策の方向性としては、当事者である児童・生徒と密接に関わる親や教師の他に、地域の人たちも巻き込んだ地域づくり的展開が求められる。

【謝辞】

今回の調査にご協力いただいた、児童・生徒の皆様、調査協力校、熊本県有明地域振興局教育委員会、玉名市教育委員会、岱明町教育委員会に厚くお礼申し上げます。

【文献】

１）熊本県. 有明地域保健医療計画. 熊本県：熊本県；平成 15 年. p.51－53.
２）田上民子.「まちの保健室」イコイバ. In：社団法人日本看護協会専門職業部編. 地域における看護提供システムモデル事業. 東京：社団法人日本看護協会専門職業部；平成 15 年. p.22－23.
３）久佐賀真理. 宮本聖子. 田上民子他. 大人との協働による思春期の居場所づくりに参加した 7 人のピアの変化とその要因. 九州看護福祉大学紀要. 2004；6（1）：p.113－126.
４）三宅和夫. 北尾倫彦. 小嶋秀夫編. 教育心理学小事典. 東京：有斐閣；1991. p.133-134.
５）武田敏. イギリス・アメリカの性教育. 周産期医学. 2002；32（4）：p.496
６）JKYB 研究会. 川畑徹郎編.「健康教育とライフスキル学習」理論と方法. 東京：明治図書；1996. p.12.
７）「現代性科学・性教育事典」編纂委員会. 現代性科学・性教育事典。東京：小学館；1995. p.168.
８）遠藤辰雄. 井上祥治. 蘭千壽編. セルフ・エスティームの心理学. 京都：ナカニシヤ；1992：p.19 . p.26-39 . p.189
９）小林正子. 衛藤隆. 思春期におけるからだの発達. 周産期医学, 2002；32（4）：p.450.
10）遠藤利彦. 子どもに育てたい社会性とは何か. 児童心理. 2004；２：p.９.
11）有吉允子. 思春期のこころ. 子どもの虐待とネグレクト, 2001；3（1）：p.42－45.
12）社会福祉法人日本子ども家庭総合研究所編. 日本子ども資料年鑑 2004. 東京：KTC 中央出版；2004. p.322
13）A.W.ポープ, S. M.ミッキヘイ. W.E.クレイグヘッド. 自尊心の発達と認知行動療法. 東京：岩崎学術出版社；1992. p.19－38
14）佐藤一子. いま学校で社会性は育てられるか－地域社会・学校との関わりの中で－. 児童心理. 2004；２：p.26

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol.7, No.1, 35-43 (2005)

ISSN 1344-7505

［**Short Communication**］

High Self-Esteem during Puberty and its Sustainers
– Based on Survey at Ariake District in Kumamoto Prefecture–

Mari Kusaga [1*], Taeko Ogata[1], Chieko Yoda [2], Minako Morikawa [3], Fumiko Soga[4], Hisako Nahara[1], Eiko Nagata[2], Junnya Tokunaga[1], Eishi Suenaga [2],

[1] *Kyushu University of Nursing and Social Welfare, Kumamoto 865-0062,Japan*
[2] *Ariake Public health Center, Kumamoto Prefecture* [3] *Ishinuki Primary School, Tamana City*
[4] *Tamana Junior High School, Tamana City*

【Abstract】

A survey on 245 sixth-graders and 356 eighth-graders was conducted regarding their physical and mental anxieties and concerns accompanied by puberty and their relationship with parents, friends, schoolteachers, and neighbors, in order to clarify the connection between these and the high self-esteem (to like oneself). The results showed that 39% of the sixth-graders and 24% of the eighth-graders had high self-esteem. The high self-esteem groups and the low self-esteem groups in both age brackets were then compared. While neither mental and physical anxieties and concerns nor relationships with surrounding people had obvious connections with the degree of self-esteem in the primary school level, the junior high school level showed that high self-esteem was contributed by "schoolteachers who listen to their concerns and problems" and "neighbors who are on speaking terms with them", and that low self-esteem was connected to "presence of mental and physical anxieties", "experiences of troubled relationship with friends", and "lack of recognition of parental love". These findings suggested that, 1) high self-esteem, or positive feeling for oneself, deteriorated as the grades increased (from sixth to eighth), 2) an otherwise lowering self-esteem could be sustained by commitment of parents, teachers, and neighbors, and the
preventive learning during primary school on how to address the mental and physical changes associated with the secondary sexual characteristics and the troubles of friendship.

***Key words*: puberty, self-esteem, commitment of adults, learning on the secondary sexual characteristics, trouble of human-relationship**

*Corresponding author, FAX：＋81-968-75-1878, E-mail：kusaga@kyushu-ns.ac.jp